



| | |
|------------------|---|
| Title | 一九五〇年代における炭鉱労働者のうたごえ運動 |
| Author(s) | 水溜, 真由美 |
| Citation | 北海道大学文学研究科紀要, 126, 61(右)-103(右) |
| Issue Date | 2008-11-28 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/34983 |
| Type | bulletin (article) |
| File Information | MIZUTAMA.pdf |



[Instructions for use](#)

一九五〇年代における炭鉱労働者のうたごえ運動

水 溜 真由美

はじめに

一九五〇年代に、各地の労働者や主婦は、地域や職場を拠点として自発的に小グループ（サークル）を組織し、文学、作文、音楽、演劇、絵画、映画、学習などの様々な文化活動を繰り広げた。これらの運動の中で、もともと広汎な市民を担い手とした運動は、間違いなくうたごえ運動であろう。当時、全国各地に無数のうたごえサークルが形成され、多くの市民が職場や地域のうたごえサークルを通じてうたごえ運動に参加した。一九五三年からは、年一度のペースで数万人におよぶうたごえ活動家が一堂に会する全国規模の「日本のうたごえ」が開催されるようになったほか、「北海道のうたごえ」、「九州のうたごえ」、「国鉄のうたごえ」、「炭鉱のうたごえ」といった、地域ごと産業部門ごとのうたごえ祭典が頻繁に開催された。

うたごえ運動は、革新運動とも切っても切り離せない関係にあった。一九五〇年代には、平和や民主主義を守るための、また資本の論理に対抗するための多くの闘いが展開されたが、これらの闘いに歌はつきものであった。闘う人々は、うたごえ行動隊や青年行動隊のサポートを受けながら、歌を歌い、団結を固め闘争心を鼓舞しあった。また、闘いは多くの名歌を生んだ。たとえば、基地反対闘争は「砂川」や「沖繩を返せ」を、核兵器反対運動は「原爆を許すまじ」を、勤評闘争は「子供を守るうた」を、三池闘争は「がんばろう」や「三池の主婦の子守歌」を生み出した。

一九五〇年代のうたごえ運動については、これまで、荒木栄など著名なうたごえ運動家の評伝や、中央合唱団のメンバーらうたごえ運動家による回顧録が出版されているが、本格的な研究はほとんどなされて来なかった。もちろん、今日においても根強いうたごえファンは少なくなく、うたごえ運動は忘れ去られてしまったというわけではないが、かつてのうたごえ運動を眼差す視線はどちらかと言えばノスタルジックであり、「民族独立行動隊の歌」など、名歌誕生にまつわるエピソードが半ば神話化されて語られる嫌いもある。近年一九五〇年代の文化運動に注目が集まりつつあるが、多くの文化運動の中でも突出した影響力を持ったうたごえ運動の実態を明らかにし、その意義を客観的に検証する作業は急務と言えよう。

本稿では、一九五〇年代におけるうたごえ運動の実態を、近年筆者が大きな関心を寄せている九州および北海道の炭鉱を中心に明らかにしたい¹⁾。その際、特に着目したい点は二点ある。

第一点は、うたごえ運動がどのような担い手によって、いかなるプロセスを辿って活発化していったのかを明らかにすることである。これまで、うたごえ運動は著名なうたごえ運動家を中心に語られる傾向が強かったが、中央合唱団や少数のうたごえ運動家の動きにのみ焦点を合わせるならば、この時代のうたごえ運動が、多くの市民が自発的に

参加した大衆運動であったことの意味を等閑視してしまうことになる。だからといって、一九五〇年代のうたごえ運動を、専ら無名のうたごえ愛好者による自然発生的な運動として捉えることも正しくない。この時代のうたごえ運動の最大の仕掛け人が中央合唱団であったことは否定できないし、職場のうたごえ運動においては労働組合が果たした役割も小さくはない。

一九五〇年代におけるうたごえ運動の実像に迫るためには、中央合唱団、労働組合、うたごえサークル、うたごえ運動家など、複合的な担い手の存在を視野に収めつつ、これらの担い手の間の相互的な関係性を把握することが不可欠である。本稿では、九州および北海道の炭鉱のうたごえ運動の例に即して、草の根的なうたごえ運動家たちが、中央合唱団、総評（日本労働組合総評議会）、炭労（日本炭鉱労働組合）、各単位組合といったフォーマルな組織のバックアップを受け、また近隣の地域や同一の産業部門に属する運動家と横断的な関係を取り結びながら、運動を広げていったことを明らかにしていきたい。

第二点は、うたごえ運動と労働運動の関わりを明らかにすることである。先に指摘したように、一九五〇年代にさかんになったうたごえ運動は革新運動と密接不可分な関係にあり、うたごえ運動は労働運動に対しても大きな貢献を行った。本稿では、一九五〇年代当時最強の単産と言われた炭労を中心とする炭鉱労働者の闘いにおいて、うたごえが果たした役割を検討したい。具体的には、どのような歌が、どのような組織・人々のバックアップの下で、どのような場面で歌われたのか、またそのことがどのような政治的な意義や効果を持ち得たのかを明らかにしていきたい。本稿の議論は以下の順序で進められる。まず第一章では、炭鉱のうたごえサークルについて論じる。具体例をふまえながら、サークルが組織化されたプロセスや、サークルの活動状況について述べる。第二章では、うたごえ祭典に

ついて論じる。全国および各地のうたごえ祭典の開催状況やプログラムを明らかにすると共に、うたごえ祭典に参加することが一般のうたごえ運動家にとつてどのような経験であつたのかという点に着目しながら、うたごえ運動の中でうたごえ祭典が果たした役割を考える。第三章では、労働運動とうたごえ運動の關係について論じる。炭鉱労働者の闘いの中で、歌がどのような文脈でどのような仕方であつたのかを明らかにし、労働運動の中でうたごえが担つた役割について考える。第四章では、一九五〇年代当時、炭鉱で歌われた労働歌について論じる。とくに炭鉱を主題とした歌に注目して、それらの歌が創作された経緯もふまえながら、炭鉱にまつわる労働歌に込められた世界観やメッセージを検討する。

一 炭鉱のうたごえサークル

一九五五年半ばに炭労の教宣部が行つた調査によれば、調査の対象となつた北海道の二一支部のうち一八支部において、また九州では一八支部のうち一一支部において、合唱隊（うたごえサークル）が組織されて^①いた。またこの調査は、うたごえサークルの存在する支部の数が、文学、演劇、写真、映画、美術など他のジャンルに比べて最も多かつたことも示している。

炭鉱においてうたごえサークルの組織化が急速に進んだ時期は、一九五四年前後である。と言っても、炭鉱におけるうたごえ運動の歩みは全国的なそれと大きく異なつていたわけではない。全国的にも、一九五三年における「日本のうたごえ」の開催の前後からうたごえ運動が急速に活発化している。

一九五〇年代におけるうたごえ運動をリードしたのは中央合唱団である。中央合唱団は、共産党の青年部であった青年共産同盟（青共）の合唱団として一九四八年に創設され、一九五一年の音楽センター設立を契機に青共から分離独立した。戦前にプロレタリア音楽同盟の初代委員長を務めた関鑑子を指導者として、当初二〇名の団員から構成されていた中央合唱団は、研究生制度を通じた専門家の養成、公演活動、「みんなうたう会」の組織化、青年歌集の発行など、うたごえの教育普及活動に大きな役割を果たした。「日本のうたごえ」も、中央合唱団によって開始された。

中央合唱団の第一期生であった奈良恒子らの回顧録は、中央合唱団員が全国各地を手弁当で回りうたごえを広めた苦労話を伝えるが、炭鉱のうたごえ運動の開始も中央合唱団員の直接的な働きかけと無縁ではなかった。たとえば、一九五二年に中央合唱団は北海道の空知一帯の炭鉱を訪れて公演を行い、その刺激を受けて、夕張、大夕張、砂川、上砂川、茶志内、浅野などの炭鉱にうたう会が組織された。また、後述するように、一九五三年一二月に開催された「九州のうたごえ」における荒木栄と中央合唱団第一期生の奈良恒子の出会いは、大牟田でうたごえ運動が活発化する大きな契機となった。^⑤

うたごえ運動が軌道に乗り始めた後も、中央合唱団は何度も山元にオルグを派遣している。たとえば、北海道阿寒町に位置していた雄別炭鉱には、一九五五年六月二三日と一九五七年八月二九日に中央合唱団が来山している。^⑥このうち後者は炭労本部の派遣によるものである。炭労はまた、一九五九年にも大規模なうたごえ講習会を開催し、藤本洋ら中央合唱団員を講師として北海道、常磐、山口、九州に派遣した。^⑧さらに、一九五四年には道炭労（日本炭鉱労働組合北海道地方本部）が一週間に及ぶ「合唱指導者講習会」を開催している。^⑨

右の例からわかるように、労働組合と中央合唱団の間には深い結びつきがあった。一九五〇年代当時、左派の労働

組合は文化活動を組合運動の一環として位置づけ、総評も、各単産も、文化活動の振興に力を入れていた。中でも、うたごえ運動は労働運動との接点が見えやすく、労働組合の理解を得やすい活動であったと考えられる。

こうした背景の下で、総評は一九五三年度の「日本のうたごえ」の後援団体となり、翌五四年三月には事務局長であった高野実が日本のうたごえ実行委員長関鑑子に総評とうたごえの提携を申し入れた。¹¹炭労も、うたごえ講習会を開催したり、創作曲のコンクールを行ったり、うたごえ祭典を開催したりして、うたごえ運動の活性化に努めた。うたごえ運動に対する労働組合の支援体制が強化される中で、中央合唱団のメンバーは、サークル運動家のみならず労働組合幹部からも、うたごえ運動の指導者として重用された。

これまで述べてきたように、うたごえを国民的規模の運動に導いた功績は中央合唱団によるところが大きい。中央合唱団が個別のサークルを「上から」組織したというわけではない。サークルの組織化は、飽くまでも労働者や市民による自発的な動きであり、中央合唱団は、こうした動きを促進しサポートしたにすぎない。また、サークルの組織化に際しては、うたごえ運動家相互の横断的な結びつきも大きな役割を果たした。

ここで大正炭鉱、日炭高松炭鉱、三井三池炭鉱を例として、山元においてうたごえ運動が組織されたプロセスを見てみよう。

福岡県中間市に位置する大正炭鉱では、一九五四年四月に中鶴うたごえ会が結成された。¹²労働組合の青年部のメンバーが、八幡うたごえ会を見学し感銘を受けたことが、サークル結成のきっかけとなった。サークルの組織化も、地域の先進的なサークルであった、八幡、直方、飯塚におけるうたごえ会の活動を参考にしながら進められた。一九五四年九月に八幡製鉄労働会館で開催された第二回九州のうたごえは、中鶴うたごえ会が飛躍的に発展する契機となり、年末には

会員数が四〇名を超えた。一九五四年一〇月に中鶴うたう会はグループの名称を「青空コーラス」に改め、翌年三月にはミニコミ『コーラス通信』が創刊された。

中間市に隣接する水巻町に位置する日炭高松炭鉱では、一九五三年の企業整備の打撃から立ち直ろうとする意気込みが、うたごえ運動を生む原動力になった。⁽¹³⁾『月刊炭労』第五八号（一九五四年二月）に早野暉雄が寄稿した「サークルだより」によると、当時の日炭高松にはすでに七〇名程度の会員を持つ合唱サークルが組織されていた。しかも「歌っている人たちは五〇〇名をこしております」という記述が見られることから、サークルのメンバーに留まらず組合員の間にうたごえ運動が広く根付いていたことがうかがえる。

ところで、『文芸誌 たかまつ』に掲載された座談会「青年運動と文化運動の展望」において、司会の平岡義人は「高松のうたごえを生みだしたのは、神谷「国善——引用者注」さんか早野「暉雄——引用者注」さんだと言われますネ」と発言している。⁽¹⁵⁾このうち早野暉雄は、共産党系の組合運動家で日炭高松の演劇サークルの中心人物でもあった。他方の神谷国善は炭鉱労働者ではなく、共産党遠賀地区委員会の常任活動に従事していた活動家である。神谷は、一九五三年七月における中央合唱団の小野光子（関鑑子の娘）との出会いをきっかけに、うたごえ運動に従事するようになった。⁽¹⁶⁾神谷は小野と出会った直後に地元で福岡おんちコーラスを組織し、一九五三年一二月に第一回「九州のうたごえ」の開催を呼びかけた。⁽¹⁷⁾神谷は、この後全九州合唱団会議の事務局長を務めるなど、九州におけるうたごえ運動の中心人物として活躍した。

次に三井三池炭鉱におけるうたごえサークルの組織化について述べる。一九五〇年代の三池におけるうたごえ運動は、一九五三年の「英雄なき一一三日の闘い」の際に、三池に派遣された日炭高松の青年行動隊のメンバーが「民族

独立行動隊」(以下、「民独」と略)の歌を歌って三池の労働者を激励し、このうたごえに荒木栄らが深い感銘を受けたことを端緒とする。⁽¹⁹⁾ 合理化反対闘争終了後の一九五三年秋、荒木栄らは映画サークル協議会を母体として歌を覚える会を組織し、同年一二月に開催された「第一回九州のうたごえ」には「蜚声会」の名の下に代表一四名を派遣した。⁽²⁰⁾ 「第一回九州のうたごえ」における荒木栄と中央合唱団の奈良恒子の出会いは、一二月一八日の「奈良さんを囲むみんな歌う会」の開催と翌一九五四年二月における中央合唱団の大牟田公演につながり、以後三池におけるうたごえ運動は飛躍的に発展することになった。⁽²¹⁾ なお、歌を覚える会はやがて水曜コーラスに引き継がれ、一九五七年には大牟田センター合唱団が発足する。他方で、荒木栄は三川坑歌を覚える会や歴木^{くみぎ}おんちコーラスなど、三池における複数のうたごえサークルの指導も担った。⁽²²⁾

次に、うたごえサークルの活動について述べる。次章で述べるように、当時のうたごえサークルにとつての最大のイヴェントはうたごえ祭典への参加であったが、メーデー前夜祭、地域の文化祭など、うたごえ祭典以外にもうたごえサークルが歌を発表する機会は数多く存在したようである。たとえば、三菱美唄合唱団は、一九六〇年の美唄地区のメーデーの前後に三夜連続で開催された公演会において、美鉄コーラスと合同で「うれたぶどう」、「夕やけ子やけ」、「俺たちや若者」、「炭掘る仲間」、「しらす畑」を発表した。⁽²³⁾ また日炭高松合唱サークルは、一九五四年一月七日に水巻町文化祭に参加して、「仕事の歌」、「原爆を許すまじ」、「船のり」を発表した。⁽²⁴⁾

うたごえサークルは、日常的にはどのような活動を行っていたのだろうか。一九五九年より高松青年合唱団(日炭高松のうたごえサークル)に参加した入江英之、柳原忠男によると、高松青年合唱団では週数回、夕方より二時間程度の練習を行っていたという。指導に当たったのは物資課に勤務していた山本英明であった。多くのメンバーは楽譜

をよむことができなかつたため、山本が楽譜をよみ楽譜に忠実に歌を教えたという。²⁵ なお、早野暉雄によれば、初期には、日炭高松労働組合歌を作曲した職員の大庭寿男がうたごえの指導を担ったという。²⁶

一般に、うたごえの指導者を炭鉱労働者、とりわけ坑内労働者の中から見出すことは難しかったようであるが、時として坑内労働者の中にも音楽的センスに特別優れた人物が存在した。大正鉱業に勤務していた小日向哲也によると、大正の青空コーラスでは「山下のイワちゃん」と呼ばれた採炭夫がうたごえを指導した。山下は、楽譜を読むことができただけでなく、素晴らしいアコーディオン奏者でもあり、飲み屋に行くとき々と歌謡曲をアコーディオンで演奏して皆を喜ばせた。また山下は、穏和で人間的にも優れた人物であつたようで、メンバーの信頼を集めたという。²⁷

うたごえ運動の参加者は、例外なくうたごえを楽しんでいたようである。元日炭高松炭鉱の労働者で「日本のうたごえ」に参加した経験を持つ山口勲も、最近刊行した写真集の中でうたごえの思い出を懐かしそうに語っている。²⁸ 北炭夕張炭鉱に勤務していた森谷猛によれば、うたごえが人気を集めたのは、当時の労働者にとってはうたごえがほとんど唯一の娯楽であり、またうたごえは若者が結びつく場、男女が出会う場でもあつたためだといふ。²⁹

とはいえ、当時のうたごえサークルは様々な悩みも抱えていた。『月刊炭労』に掲載された炭労教育宣伝部「うたごえ運動の悩み——炭鉱労働者のうたごえ」経験交流会の討論より³⁰によると、多くのうたごえサークルが、指導者の欠如、芸術性と大衆性の矛盾、組合幹部の文化運動に対する無理解・無関心、会社による圧迫などの悩みを抱えている。また、右の報告でも触れられているが、当時うたごえに「共産党の手先」、「アカの戦術」といったレッテルを貼る傾向が根強く存在し、こうしたレッテルはしばしばメンバーのサークル離れを引き起こす原因にもなつていたようである。³¹

一九五〇年代における炭鉱労働者のうたごえ運動

二 うたごえ祭典

うたごえ祭典とは、各地のうたごえ運動家が集う音楽祭であり、うたごえ運動が活発化する一九五三年後半から頻繁に開催されるようになった。うたごえ祭典は、中央合唱団によって開始された。その経緯は以下のとおりである。

一九五〇年以降中央合唱団は毎年合唱団の創立を記念する音楽会を開催していた。一九五二年一月にも創立四周年を記念する音楽会「一九五二年日本のうたごえ」が開かれたが、この「一九五二年日本のうたごえ」には、各地に組織されつつあったうたごえサークルの代表も参加していた。音楽会の直後に召集された全国合唱団会議において、関鑑子は「一九五三年日本のうたごえ」を「全国の統一された運動の結集点にすること」を提案し、支持された⁽³²⁾。この決議通り、翌一九五三年一月二九、三〇日に「一九五三年日本のうたごえ」が開催された。以後「日本のうたごえ」は全国のうたごえ運動家が集う年一度の恒例行事となり、これに伴い全国合唱団会議と日本のうたごえ実行委員会も恒常的組織となった⁽³³⁾。

うたごえ祭典は中央においてのみならず、地域ごと産業部門ごとにおいても開催されたため、うたごえ運動の活発化と共に、各地で夥しい数のうたごえ祭典が開催されることとなった。たとえば、一九五五年四月には、一ヶ月の間に、「千葉農村のうたごえ」、「大牟田のうたごえ」、「安芸のうたごえ」、「石城のうたごえ」、「山梨のうたごえ」、「北九州のうたごえ」、「静岡のうたごえ」、「中部のうたごえ」、「津軽のうたごえ」、「諏訪のうたごえ」、「遠州のうたごえ」、「東京のうたごえ」の、合計一二のうたごえ祭典が開催された⁽³⁴⁾。地域別のうたごえ祭典が、しばしば重複する地域を単

位としてこれほど頻繁に開催されたことは、うたごえが急速に各地に広がったことを示すものである。

炭鉱のうたごえ運動家が参加したうたごえ祭典には、大きく分けて、(1) 日本のうたごえ、(2) 産業部門別のうたごえ(「炭鉱のうたごえ」)、(3) 地域別のうたごえがあった。(1)の「日本のうたごえ」への炭鉱からの参加者は、一九五三年は一名、一九五四年は四六名、一九五五年は二百数十名と飛躍的に増加した。⁽³⁵⁾(2)の「炭鉱のうたごえ」は、一九五五年以後、「日本のうたごえ」の直後、または期間中に東京で開催された。この他、北海道では、一九五五年以降道炭労の主催による「北海道炭鉱のうたごえ」がほぼ毎年開催された。(3)の地域別のうたごえは、「北海道のうたごえ」、「九州のうたごえ」のほか、「福岡のうたごえ」、「筑豊のうたごえ」、「北九州のうたごえ」、「空知のうたごえ」、「赤平のうたごえ」など、様々な単位で開催された。なお、炭鉱の所在地は北海道、九州北部など、特定の地域に集中していたことから、炭鉱のうたごえ運動家が参加する地域別のうたごえ祭典では、炭鉱からの参加者の占める比重はかなり高かった。参考までに、一九五三年以降に炭鉱のうたごえ運動家が参加したと考えられるうたごえ祭典の開催状況を、知り得た範囲で表にまとめておく。⁽³⁶⁾

それでは、うたごえ祭典とはどのような催しだったのだろうか。まずは、一九五五年度の「日本のうたごえ」について見てみよう。大会当日(一月二七日)のプログラムは、昼夜二部に分かれ、昼の部は「地方別のうたごえ」に、夜の部は「産業別のうたごえ」に充てられた。また、昼夜ともに、各地のうたごえ運動家による発表の後で、東京交響楽団、中央合唱団、松山樹子バレエ団など専門家による特別公演が行われた。⁽³⁷⁾

「地方別のうたごえ」および「産業別のうたごえ」のプログラムについては、詳細は不明であるが、祭典実行委員会に、北海道・東北・北信越・関東・東京・東海・関西・山陽・山陰・九州の十地域と、電気・海運・電通・税務・農



図1 第3回筑豊のうたごえ。左手壁に「古河目尾炭鉱労働組合」の旗が見える。壇上で歌っている合唱団は炭婦協のサークルであろうか。1959年5月24日、山口勲氏撮影。山口勲『ボタ山のあるぼくの町 山口勲写真真集』海鳥社、2006年、96頁より転載。

林・基地・司法・都市交・紙パ・金融・私鉄・教員・造船・農業団体・全通・ホテルレストラン・医療・ガス・新聞放送・百貨店・炭鉱鉱山・繊維・金属・印刷出版・国鉄の二五産業部門が参加していることを考えると、おそらくこれらの地域・産業部門の区分に基づいて発表が行われたものと推測される。なお、「産業別のうたごえ」において、炭鉱の合同合唱団は「燃えるボタ山」と「おぼろ月夜」を歌ったが⁽³⁹⁾、この発表に備えて、炭労働者部は「炭鉱労働者のうた」を組合員から募集した。「燃えるボタ山」はその入選作の一つで、三菱上山田炭鉱の大江将精の詩に、中央合唱団のいづみたくが曲をつけたものである⁽⁴⁰⁾。当日は、炭労からの男性の参加者は坑内帽にキャップランプをつけて歌を披露した⁽⁴¹⁾。なお、大会の翌日である二八日には地方別、産業別の交流会が開催された⁽⁴²⁾。

地域のうたごえの場合も、「日本のうたごえ」と同様、地域ごと、産業部門ごとの合同発表を軸にプログラムが組まれた。たとえば、一九五五年度の「九州のうたごえ」のプログラムは、第一部「地域のうたごえ」、第二部「農漁村のうたごえ」、第三

表1 うたごえ祭典開催状況 (1953-60)

| 開催時期 | 名称 | 会場 | 参加者数 |
|---------------|---------------|---------------|--------|
| 1953.11.29,30 | 日本のうたごえ | 日比谷公会堂、神田共立講堂 | 6000名 |
| 1953.12.13 | 第1回九州のうたごえ | 九州大学医学部講堂 | 400名 |
| 1954.9.26 | 第2回九州のうたごえ | 八幡製鉄労働会館 | 1600名 |
| 1954.11.27-29 | 日本のうたごえ | 神田共立講堂、東京体育館 | 15000名 |
| 1955.3.5,6 | 第1回北海道炭鉱のうたごえ | 三井美唄互楽館 | |
| 1955.3.20 | 雄別のうたごえ | 雄別協和会館 | 68名 |
| 1955.3.27 | 第2回春採のうたごえ | 太平洋春採会館 | |
| 1955.4.3 | 北九州のうたごえ | 三萩野体育館 | |
| 1955.9.24,25 | 第3回九州のうたごえ | 長崎市勝山小学校講堂 | 2600名 |
| 1955.11.27 | 日本のうたごえ | 東京国際スタジアム | 40000名 |
| 1955.11.29 | 第1回炭鉱のうたごえ | 教育会館 | |
| 1956.9.22,23 | 第4回九州のうたごえ | 大分県荷揚町体育館 | 6500名 |
| 1956.10.20,21 | 第2回北海道のうたごえ | 札幌市中島スポーツセンター | |
| 1956.12.1,2 | 日本のうたごえ | 東京体育館ほか | |
| 1956.12.2 | 第2回炭鉱のうたごえ | 全銀連会館 | |
| 1957.8.25 | 第2回赤平のうたごえ | 北炭赤間会館 | |
| 1957.9.7,8 | 第2回北海道炭鉱のうたごえ | 三井芦別鉱1、2坑会館 | 5000名 |
| 1957.9.20,21 | 第5回九州のうたごえ | 福岡スポーツセンター | 6000名 |
| 1957.9.29 | 第3回北海道のうたごえ | 札幌市中島スポーツセンター | |
| 1957.12.13-15 | 日本のうたごえ | 東京都体育館 | 30000名 |
| 1957.12.14 | 第3回炭鉱のうたごえ | 東京芝浦会館 | |
| 1958.8.30,31 | 第3回北海道炭鉱のうたごえ | 赤平市親友会館 | 4200名 |
| 1958.10.4,5 | 第6回九州のうたごえ | 大牟田市体育館 | 5000名 |
| 1958.12.6-8 | 日本のうたごえ | 東京都体育館 | |
| 1959.3.22 | 第1回福岡のうたごえ | 九州大学講堂 | |
| 1959.4.24 | 第3回筑豊のうたごえ | 鉱士館(三井田川炭鉱) | |
| 1959.9.26,27 | 第7回九州のうたごえ | 熊本市水前寺体育館 | 5000名 |
| 1959.12.5,6 | 日本のうたごえ | 東京都体育館 | |
| 1960.6.5 | 三池のうたごえ | 三池炭鉱ホッパー前 | 5000名 |
| 1960.8.13,14 | 第2回西日本のうたごえ | 三池炭鉱ホッパー前 | 5500名 |
| 1960.8.28 | 第2回北九州のうたごえ | 八幡市民会館 | 1300名 |
| 1960.9.24,25 | 第5回北海道炭鉱のうたごえ | 天竜グラウンド、夕張会館 | |
| 1960.10.10 | 第2回福岡のうたごえ | 九大医学部ホール | |
| 1960.10.30 | 第8回九州のうたごえ | 小倉市民会館 | 5000名 |
| 1960.12.10,11 | 日本のうたごえ | 東京都体育館 | 35000名 |

部「産業別のうたごえ」から構成されている。⁽⁴³⁾この祭典において、日炭高松からの参加者は、第一部では筑豊の代表として「赤とんぼ」と「俺たちの国」を、第二部では炭鉱の代表として「俺は炭鉱夫だ」と「炭鉱ばやし」を歌ったようである。⁽⁴⁴⁾なお、一九五五年度の「九州のうたごえ」に炭労からは三一〇名が参加し、炭鉱労働者の合唱は、「俺は炭鉱夫だ」にアンコールが出るなど、聴衆から喝采を浴びた模様である。⁽⁴⁵⁾

地域ごと、産業部門ごとの発表を中心とするうたごえ祭典のプログラムは、各地域・各産業部門のうたごえ運動家の結束を自ずから強めることにつながった。まず、各地域や各産業部門の特色を考慮した選曲は、合同合唱団に組織されたうたごえ運動家の仲間意識を強化した。さらに、運動家たちはうたごえ祭典の期間中に開催される交流会や懇談会において、さらには宿泊先や道中においても、対話し交流を深めた。とりわけ往復の汽車の車内は、参加者によるうたごえ合戦が繰り広げられるなど一種異様な熱気に包まれていたようである。また、うたごえ祭典を準備する過程においても、連絡を取り合い会合を持つなど、⁽⁴⁶⁾運動家同士の連携は強められた。

最後に、釧路の太平洋炭鉱の労働者の視点によりながら、一九五五年度の「第一回北海道炭鉱のうたごえ」の全行程をたどってみたい。以下の記述は、釧路の太平洋炭鉱で発行されていた文化誌『響土』第八号（一九五五年六月）に掲載された石川忠司・秋田菊男「ルポルタージュ 北海道炭鉱のうたごえ——美唄にて」⁽⁴⁷⁾によるものである。

「第一回北海道炭鉱のうたごえ」に、太平洋炭鉱からは五六名が参加した。三月四日夕方、駅前（釧路駅前と思われる）は代表団と見送りの組合員および家族で溢れ、誰からとなく「平和を守れ」、「民独」などが歌い出された。武藤釧炭協議長らの激励の言葉と代表団の挨拶の後、「俺は炭鉱夫だ」の合唱と「うたごえ」万歳が行われ、列車はうたごえ祭典の会場である美唄に向けて出発した。列車の中で、太平洋炭鉱の労働者は、釧炭協代表（計九五名）を構成す

る、雄別炭鉱、庶路炭鉱、尺別炭鉱の労働者と合流した。列車の中では、自己紹介、やまごとのうたごえ交流が行われ、組合歌、唱歌、民謡、童謡など様々な歌が九時過ぎまで歌われた。

列車は、五日朝の五時前に美唄駅に到着した。一行は労働会館で休息を取った後、市中パレードに参加するため全道の炭鉱のうたごえ運動家が集う美唄駅前に向かった。パレードの後、午後三時より三井美唄互楽館にて「北海道炭鉱のうたごえ」が開催された。一日目の主なプログラムは、「炭婦協のうたごえ」、中央合唱団の公演、「地区別のうたごえ」であった。「地区別のうたごえ」において釧路地区の代表団は、太平洋、雄別、尺別各々の組合歌と太平洋炭鉱の佐藤広志が作曲した「デモ行進」を披露した。夕食後には、太平洋代表団と三井美唄文工隊の座談会が開かれた。

翌六日には「サークル別のうたごえ」が行われ、北海道の炭鉱のサークルと友誼団体が歌を披露した。この時、太平洋合唱団は、「朝やけカノン」、「おめでとうワルツ」、「平和をかえせ」、「赤旗はなびくよ」を発表した。「赤旗はなびくよ」では、日鋼室蘭の労働者と太平洋合唱団のメンバーと一緒に歌い、会場に大きな感銘を与えた。他方で、日鋼室蘭の労働者の発表の折には、太平洋代表団とスクラムを組んで「民独」を合唱する一幕もあった。⁽⁴⁸⁾また、「英雄なき一三日の闘い」において労働者を絶えず激励した三井美唄文工隊に赤旗が送られた際には、会場は大きな感動に包まれた。最後の全員合唱では、「平和をまもれ」、「俺は炭鉱夫だ」、「原爆をゆるすまじ」、「世界をつなげ花の輪に」、「民独」が歌われた。この時、「舞台と、客席とそして階下と会場に隣り合う腕と腕はスクラムとなり、スクラムは体ごととげしく左右に波うち、会場をうめつくした約二千人の人と、どよめくうたごえは、二日間通して再興の興奮のつぼとなった⁽⁴⁹⁾」という。

三 闘いとうたごえ

うたごえは労働運動と切っても切り離せない関係にあった。日炭高松の入江英之によれば、組合関係の集会の開始時には、決まって合唱団やうたごえ行動隊が壇上で何曲か歌を歌ったという⁽⁵⁰⁾。北炭夕張の森谷猛も、組合の大会の開始前には合唱指導が行われるのが常で、議案書など配布資料の裏に楽譜や歌詞が印刷されていたと証言する⁽⁵¹⁾。

メーデーにも歌がつきものだった。そもそも労働歌の歴史は、メーデーと密接に結びついている。日本でよく知られている労働歌の中には、「世界よつなげ花の輪に」、「町から村から工場から」、「晴れた五月」など、メーデー歌として創作された歌が少なくない⁽⁵²⁾。また、かつてはメーデー歌集も発行されていた。たとえば、一九五五年のメーデーの際に福岡地区で発行された『第二六回メーデー歌集』には、「原爆を許すまじ」、「世界をつなげ花の輪に」、「インターナショナル」、「民独」、「俺は労働者だ」、「若者よ」など二四曲の歌詞が収録されている。

メーデーの際には、どのような歌がどのような場面で歌われたのだろうか。一九五五年五月一日発行の『炭労新聞』は、この年の北海道地区の統一メーデーにおいて、大会の開会前に「世界をつなげ花の輪に」の合唱が行われたこと、また福岡地区のメーデーでは、デモ隊の解散前に「民独」の合唱が行われたことを報じている⁽⁵³⁾。三井三池の原守男によれば、メーデーでは大会の開会前とデモ隊を会場から送り出す間、合唱団が壇上で歌を歌ったという⁽⁵⁴⁾。雄別炭鉱の石田政治の生活記録「メーデーの一日」には、デモ行進の際に青年行動隊員がデモ隊の中に入って、「聞け万国の労働者」、「赤旗はなびくよ」、「俺は炭鉱夫だ」、「世界をつなげ花の輪に」などの歌を歌ったことが記されている⁽⁵⁵⁾。



図2 メーデーの大会で歌う日炭高松炭鉱の文化サークルのメンバー。列の中央はアリババに扮した早野暉雄。1955年5月1日、山崎富士雄氏撮影。『写真万葉禄・筑豊 第2巻 大いなる火(上)』葦書房、1985年、124頁より転載。

それにしても、労働運動の中でこれほどまでに頻繁に労働歌が歌われたのはなぜだろうか。その理由は、うたごえが団結心を強め闘争心をかき立てる力を備えていたからであろう。住友赤平の岩井勇は、「執行部の話を聞いても労働者の反応はあんまりよくないけれど、歌を歌えば一つになる」と述べる⁽⁵⁶⁾。そのため、うたごえは、賃上げ闘争、合理化反対闘争などの困難な闘いの局面において大きな力を発揮した。以下では、一九五〇年代から六〇年代初頭までの炭鉱労働者の闘いにおいて、うたごえがどのような役割を果たしたのかを、具体例に即しながら検討したい。

一九五四年一月一四日より、三菱美唄炭鉱労働組合は炭労期末手当闘争の一環としての重点ストに突入した。四三日間に及んだこのストライキにおいて、うたごえは闘いに大きく貢献した。一九五四年一月二一日発行の『炭労新聞』第二二

八号には、「非常事態を宣言 中央ブロック」の見出しを掲げた記事の上に、「闘いの気にあふれて労働歌を合唱する 三菱美唄の文工隊」の写真が掲載されている。三菱美唄のうたごえ運動家であった本間務によると、三菱美唄では、スト突入後、文化サークルを中心にいち早く文化工作隊（文工隊）が組織された。⁽⁵⁷⁾ 文工隊の主な任務は、労働歌を歌って闘う組合員と家族を激励すること、組合員と家族に労働歌を指導して労働歌を広めることであった。実際に、文工隊の指導によって、瞬く間に「民独」、「俺は炭鉱夫だ」、「インターナショナル」、「平和を守れ」などの労働歌が組合員と家族の間に浸透した。なお、『炭労新聞』に掲載された写真は、大会の会場である番町グラウンドにジグザグデモをしながら入場する組合員と家族を文工隊が歌で迎える場面を撮影したものであるようだ。

一九五八年春には、炭労の指令の下で賃上げを要求する四社一五山の重点ストが行われた。三井芦別の畑中康雄のルポルタージュ「無期限ストライキ」⁽⁵⁸⁾ は、このストにおいて、うたごえが闘争の一翼を担ったことを詳しく伝えている。三月二一日のスト突入以来、三井芦別のスト集会場となった会館では、毎朝うたごえサークルの「山びこ合唱団」による歌唱指導が行われた。当初、多くの組合員は一九五三年の企反闘争の時に「たったひとつうたい通した」「赤旗」以外の歌を知らなかった。しかし、スト突入後に組合は歌集を作って全組合員に配布し、歌唱指導を行ったため、「インターナショナル」や「しあわせの歌」を始めとする様々な労働歌が歌われるようになった。中でももともとよく歌われた歌は、「燃やせ闘魂」であったという。

一九五八年の重点ストの際に同じくチャンピオン山に指定された住友赤平においても、ほぼ同じような光景が展開されていたようだ。⁽⁵⁹⁾ 三月二一日のスト突入後、組合員は、公休日以外はほぼ毎朝赤上会館に「出勤」して、約一時間、青年行動隊（青行隊）から労働歌の歌唱指導を受け、前日の情勢報告を聞くことを日課とした。また、ストの最中に、

うたごえを通じて近隣の炭鉱労働者と交流することもあった。記録によると、四月三日、赤平の青行隊は同じく重点ストを闘っていた北炭神威の全山総決起集会に乗り込んで、神威の労働組合員とエールを交わし、神威の青行隊や合唱団の仲間とスクラム組みながら、「しあわせの歌」を歌った。その直後、赤平の青行隊は住友歌志内坑に赴いて進発所で歌志内の労働者と交流を行った後、一緒にかけたつけた神威の同志と共に「民独」を力強く合唱したという。

他社におけるストライキに、うたごえオルグが派遣されることもあった。一九五〇年代に北海道で闘われた大規模な反合理化闘争として知られる日鋼室蘭と王子製紙の闘いでは、道炭労、北三連（北海道三井炭鉱労働組合）など道内の炭鉱の労働組合が多数のうたごえ運動家を現地に派遣した。日鋼室蘭闘争の際、北炭新夕張からオルグに派遣された笠嶋一は、炭鉱の文化活動が日鋼室蘭闘争に大きく貢献したと述懐している。当初、日鋼室蘭では青行隊や文化サークルは存在せず、「民独」を知っている労働者も少なかった。けれども、オルグ団が日中居住地を回って熱心に歌を教え、炭労の闘争体験を語るなどして交流を重ねた結果、組合員や主婦は労働歌をマスターし、青行隊やサークルが続々誕生するに至ったという。その結果、うたごえを闘いの武器とした日鋼室蘭の労働者は、闘争中に警官と対峙した際には、炭労のオルグが指導した「俺は炭鉱夫だ」の三番（「赤旗ゆればホイ ポリ公がこん棒振るホイ」のフレーズを含む）を繰り返し歌って警官を鼻白ませた。⁽⁶⁰⁾王子製紙の闘いの際にオルグに派遣された三井芦別（61）の明白望も、「俺は炭鉱夫だ」にまつわる類似のエピソードについて語っている。⁽⁶²⁾

また、一九五七年八月二日より九六日間におよぶストライキを闘った杵島炭鉱の反合理化闘争では、日鉄二瀬炭鉱のうたごえサークル「山のコーラス」のメンバー二名が八月二四日に杵島を訪れ、各居住区分会一三カ所でうたごえによる激励を行った。これをきっかけに、杵島ではうたごえ活動が急速に活発化した。⁽⁶³⁾とりわけ、荒木栄が作詞作

曲した「燃やせ闘魂」は、警官が覚えてしまうほど、争議中に頻繁に歌われたという。⁽⁶³⁾

これまで見てきたように、一九五〇年代にうたごえは闘いを支える大きな力として機能したが、うたごえと労働運動の結びつきをもっとも顕著に示した闘いは、何と言っても三池闘争であろう。「総資本対総労働の闘い」と言われた三池闘争において、労働者は持てる人的・物的資源を総動員して闘争に臨んだが、その中には一九五〇年代を通じて培われたうたごえ運動の大きな遺産も含まれていた。

三池闘争においてうたごえが果たした役割をもっとも強く印象付けるのは、三池闘争の記憶と結びついた歌が多数存在することである。とりわけ、争議中に至るところで繰り返し歌われた三池炭鉱労働組合の組合歌「炭掘る仲間」と「燃やせ闘魂」は、三池闘争のシンボルであった。また闘いの中で、「みんなでみんなを敵をうて」、「おれたちの胸の火は」、「三池の主婦の子守歌」、「がんばろう」、「団結おどり」などの名歌が生まれた。三池闘争は、これらの歌を作曲した荒木栄を三池の労働者作曲家として広く知らしめることになった。この他、宇部興産東見初炭鉱の花田克己が作詞した「炭鉱の娘」、「炭鉱の子」も闘争の中で愛唱された。争議中にオルグとして三池に派遣された花田は、興炭のオルグ責任者としてよりも、「炭鉱の娘」と「炭鉱の子」の作詞者として三池の組合員や家族に紹介されたと述懐している。⁽⁶⁴⁾

三池炭鉱では、争議が本格化する以前から労働者の間にうたごえが広く浸透していたようだ。一九五九年一〇月に総評・炭労の要請により三池に派遣された中央合唱団のメンバーは、『炭労新聞』誌上の座談会において、組合歌である「炭掘る仲間」が労働者によく歌われていること、三川坑の労働者が入坑前に歌を歌うことを日課としていること、三川坑の繰込場の壁には「炭掘る仲間」と「民独」の歌詞が貼り付けてあることなどを熱く語っている。⁽⁶⁵⁾

第一章でも触れたように、一九五〇年代半ばより三池炭鉱ではうたごえ運動が盛んで、スト期間中には、炭坑毎に、宮浦合唱団、三川うたごえ行動隊、四山うたごえ行動隊が組織され、独自の活動を展開した。一九六〇年二月二日付けの三池労組の機関紙『みいけ』第六一二号では、「うたごえ盛ん」という見出しで、ロックアウト以来、うたごえサークルのメンバーの指導により、各地域でうたごえの練習が活発化していることが報じられている。宮浦合唱団のメンバーであった木下喜和によると、スト期間中、宮浦合唱団は「宮浦支部闘争本部に半ば合宿したような形で、労働歌等の練習を行ない宮浦鉱の各社宅（大砂、紅葉ヶ丘、通松、馬渡、旭日丘、大谷等々）をうたごえで激励して回り、決起集会がある時などは要請を受け出向いていた」という⁽⁶⁶⁾。

聞き取りによると、各社宅の集会場に設置されていたスピーカーから流れる音楽が、三池の労働者と家族にうたごえを浸透させる一助となったようだ。三池争議の際に中学生だった曾村征子は、当時居住していた四山坑の社宅近くのスピーカーから、時折「炭掘る仲間」が流れてきたと回想する。曾村の父は指名解雇を受けたため争議後家族は社宅を離れたが、スピーカーの影響か、曾村はいつしか「炭掘る仲間」や「がんばろう」を記憶していたという⁽⁶⁷⁾。緊急動員の合図にも音楽が用いられた。村上昭一は、村上が居住していた四山坑の社宅では、スピーカーから流れる「燃やせ闘魂」が緊急動員の合図であったと証言する⁽⁶⁸⁾。

なお、争議が本格化した頃から、中央合唱団員を始めとしてうたごえ関係のオルグが多数三池に来山した。一九六〇年三月二〇日からは、大牟田および各地のオルグが合同でうたごえ行動隊を組織し、日曜毎に社宅を回って組合員やその家族を激励する統一行動を展開した。四月初めには、中央合唱団の奈良恒子、全九州合唱団会議の神谷国善、大牟田センター合唱団の荒木栄らによる現地指導部が組織され、組合本部前に建てられたバラック小屋に常駐し、全



図3 三池闘争における地域でのうたごえ指導。1960年6月、三池労働組合写真班撮影。『三池労働闘争の記録・写真集』Vol.1より転載(205)。

国から派遣されたオルグの受け入れと指揮に当たった。⁽⁶⁹⁾
全国から三池に支援にかけつけたうたごえオルグは、四
月中に千人を越えた。⁽⁷⁰⁾

四月三日の第三次統一行動を例に、オルグ団によるう
たごえ行動隊の活動を見てみよう。この日のうたごえ行
動隊には、九州青年合唱団一三名、熊本青年合唱団一〇
名、佐賀青年合唱団一三名、鹿児島青年合唱団八名、大
牟田センター合唱団二五名、北九センター一名、中央合
唱団五名、若松わだちの会七名の計八二名が参加した。

四月三日朝、うたごえ行動隊は三鉱労組本部前に集結し、
「うたは闘いと共に」、「三池闘争を共に闘おう」の横断幕
や各合唱団のプラカード・団旗を掲げ、「大行進の歌」や
「炭掘る仲間」等を合唱しながら三川坑に向けて行進し
た。三川坑到着後、行動隊は正門前でピケをはる労働者
と共に合唱した。午後には、うたごえ行動隊は四山炭住
街に赴き、各合唱団毎に、各門ピケ隊・地域分会へと分
散して歌唱指導および公演活動を行った。この時歌われ

た歌は、「みんなでみんなで敵をうて」、「民独」、「どんと来い」、「千里の駒」、「うれたぶどう」、「金は天下の回りもの」、「炭掘る仲間」などであった。また午後四時には、うたごえ行動隊は組合支部横に約千名のオルグ団組合員家族を集め、「三池を勝ち抜くうたごえ交流会」を開催した。⁽⁷⁾

うたごえ行動隊は、組合員や家族から熱烈に歓迎された。たとえば争議中に組合が発行していた『日刊情報』の第六五号（一九六〇年四月一四日）は、中央合唱団の女性メンバーによるコーラス隊が、三川、四山、港務の各門ピケ隊を激励したことを報じ、この時の光景を、「女性だけのコーラスはどこも大歓迎で、アンコール、アンコールの声に夜更けまでうたい続け、のどがつぶれうそになった人もでたほど、どのピケ隊でもうたが終わってから団結がんばろうを三唱して別れてきたが「ありがとう。またきてくれよ」という声がいつまでも夜空にこだましていた」と描写している。「ピケ隊や社宅でひっぱりだこであった」⁽⁸⁾うたごえ行動隊の存在は第二組合員も羨むほどであったようで、争議を誹謗する論者からも、「三池の旧労にあるものは、新労にも何でもある。ただないのはカンパとうたごえ行動隊だ」という発言が聞かれた。⁽⁹⁾

このほか、全国のうたごえ運動家が三池の闘いをバックアップしたことを示す出来事として、争議中に三池でうたごえ祭典が二度開催されたことが挙げられる。一度目は、一九六〇年六月五日の「三池のうたごえ」、二度目は八月一三日、一四日の「第二回西日本のうたごえ」で、いずれも三川坑ホッパー前広場で開催された。「第二回西日本のうたごえ」は、中労委のあつせん案発表（八月一〇日）の直後、運動家二千名、組合員三千名の計五千名を結集して開催され、「あつせん案拒否」の最初のデモンストレーションとなった。⁽¹⁰⁾舞台には、全国から寄せられた赤旗の寄せ書きをつなぎ合わせた幕が張られ、「うたごえは平和の力」、「統一と団結で勝利の笑顔、三池の火を全国へ」などのスローガ



図4 第2回西日本のうたごえ、ホッパー前に5000人結集。1960年8月14日、三池労働組合写真班撮影。『三池労組 闘争の記録・写真集』Vol.1より転載(294)。

ンが掲げられた。一四日の本祭典では、参加者は三池の火のたいまつを手にして「燃やせ闘魂」を歌い、あつせん案拒否の決意を固めた。⁷⁶

さらに三池闘争は、現地に派遣されたオルグにうたごえの力を再認識させる効果ももたらした。日炭高松の柳原忠男は、三池闘争が停滞していた日炭のうたごえ運動を再興する契機になったと述べる。歌が好きだった柳原は、一九五〇年代半ばには地域の水巻混声合唱団に加入していたが、このサークルでは、指導にあたっていた水巻中学校の音楽教員の嗜好を反映して「民独」、「原爆許すまじ」といった政治的な歌は取り上げられず、叙情歌が中心に歌われたという。柳原は、三池闘争の際労働組合から派遣されてオルグに行き、うたごえ行動隊の活動を目の当たりにして、「歌がどれだけ働く人を勇気づけるか」を思い知ったという。柳原は山元に戻った後、高松青年合唱団に参加すると共に、一九六一年以降の日炭高松の反合理化闘争（高松闘争）では、うたごえ行動隊の

メンバーとして熱心に活動した。⁽⁷⁷⁾ 入江英之によると、高松闘争では、うたごえ行動隊が頻繁に社宅を回って組合員や主婦に歌を歌って闘いを激励し、また歌唱指導を行って歌を広めた。同時に、中央合唱団のメンバーも来山して、うたごえ行動隊のメンバーに歌を指導したり、一緒に社宅回りをしたりした。こうしたうたごえ行動隊の手法は三池闘争時のそれと共通するが、高松闘争では、三池に派遣されたメンバーが多数うたごえ行動隊に参加したため、三池の闘いから多くを学んでいるとのことである。⁽⁷⁸⁾

四 炭鉱で歌われた労働歌

炭鉱のうたごえ運動や闘いの中ではどのような歌が歌われたのだろうか。主な曲目についてはすでに言及したが、本章では、炭鉱をテーマにした歌を中心に、それらの歌が創作された背景や、歌詞の内容を含めて、詳しく検討したい。

当時の炭鉱労働者に頻繁に歌われた歌としては、「インターナショナル」、「赤旗」など定番の労働歌や、一九五〇年代のうたごえ運動の中で生まれた「民独」、「しあわせの歌」、「原爆を許すまじ」などが挙げられる。⁽⁷⁹⁾

このうち「民独」は、国鉄大井工場の労働者であった山岸一章がレッドパージを目前にした賃金闘争の際に煙突の上で作詞したとされる伝説の歌であるが、炭鉱の闘いとも深い結びつきがあった。⁽⁸⁰⁾ 前述したように、一九五〇年代の三池におけるうたごえ運動は、一九五三年の英雄なき一一三日の闘いの際に日炭高松の青年行動隊のメンバーが歌った「民独」に触発されて開始された。当時、地域の合唱サークルであった三池混声合唱団の「芸術追求のサロンのな

方向」に飽き足らなくなっていた荒木栄は、高松のメンバーの歌う「民独」に大きな衝撃を受け、「第二の民独の歌」を自ら創作する決意を固めたという。⁽⁸¹⁾ 日炭高松の労働者の間で「民独」が愛唱されていたことは、日炭のサークル運動家であった上野英信による「せんぷりせんじが笑った」の中に、職場闘争を闘い、横暴な係長を更迭させた職場組合員が意気揚々と「民独」を歌う場面が描かれていることからもうかがうことができる。⁽⁸²⁾ 「民独」はまた、日炭高松に留まらず炭鉱における数々の闘いの中で頻繁に歌われた。「民族の自由を守れ 決起せよ祖国(南部)の労働者 栄えある革命の伝統を守れ」という戦闘的な歌詞と、勇ましいメロディーが、闘う炭鉱労働者の士気を高めたことが推測できる。

他方で、炭鉱で歌われた労働歌の中には炭鉱および炭鉱労働者をテーマにした歌が少なくなかった。そのうち、「俺は炭鉱夫だ」は、もつとも広く愛唱された曲の一つである。まずは、太平洋炭鉱労働組合の文化誌『響土』第八号から歌詞を転載しよう。⁽⁸³⁾

一 腕は筋金 ホイ まなこは黒ダイヤ ホイ

ほんにそうだそうだ ホイ

俺は炭鉱夫だ 俺は労働者だ

ホーイホイ ホイホイ

それその腕つなご みんなきてつなご

二 俺が掘らなきゃ ホイ 炭ころ出るもんか ホイ

ほんにそうだそうだと ホイ

俺は炭鉱夫だ 俺は労働者だ

ホーイホイ ホイホイ

それどんと闘おう 今日も闘おう

三 赤旗ゆれば ホイ ポリ公が棍棒ふる ホイ

それがなんだなんだホイ

俺は炭鉱夫だ 俺は労働者だ

ホーイホイ ホイホイ

それスクラム組もう がっちり組もう

「俺は炭鉱夫だ」は、太平洋炭鉱のうたごえ運動家佐藤広志によつて作詞作曲された曲で、一九五四年の日鋼室蘭闘争の際に北海道の各炭鉱から支援にかけつけたオルグが「俺は労働者だ」として歌い広め、全国に広く知られるようになった。⁸⁴「俺は炭鉱夫だ」は早くから炭鉱労働者に親しまれ、一九五四年に開催された「日本のうたごえ」では炭鉱の合同合唱団の発表曲に選ばれるなど、うたごえ祭典でも頻繁に歌われた。⁸⁵第二章で述べたように、「第一回九州のうたごえ」と「第一回北海道炭鉱のうたごえ」においても、「俺は炭鉱夫だ」は参加者の喝采を巻き起こした。ちなみに、

『月刊炭労』誌上の文芸コンクールの入選作である滝原和男（雄別炭鉱）の戯曲「共闘」は、主人公である仕繰夫の平田が「俺は炭鉱夫だ」を口ずさむ場面から始まり、主人公が「炭鉱のうたごえ」でこの曲を教わったことを、「炭鉱のうたごえ」に参加した感激と共に仲間語る場面が描かれている。⁽⁸⁶⁾

「俺が炭鉱夫だ」が炭鉱労働者に愛唱され、また闘いの中でも頻繁に歌われた理由は、炭鉱労働者のアイデンティティを前面に押し出していること、階級闘争のモチーフをわかりやすい形で盛り込んでいること、歌詞が平易かつコミカルで親しみやすいことなどにあると言えるだろう。聞き取りにおいても、この曲が炭鉱のうたごえ運動家の間で人気が高かったことが確認できた。たとえば、北炭夕張の森谷猛は、「俺は炭鉱夫だ」は「内容が明快で曲も明るく、皆が好んで歌っていた」と述べた。⁽⁸⁷⁾ 大正の小日向哲也も、大正のうたごえサークルのメンバーが「俺は炭鉱夫だ」を「熱を入れて歌った」と述べて、筆者にこの曲を歌ってくれた。⁽⁸⁸⁾

「俺は炭鉱夫だ」を始めとして、炭鉱をテーマにした労働歌は、ほとんどが炭鉱のうたごえ運動家の創作であった。第二章でも触れたが、炭労は「一九五五年 日本のうたごえ」における発表に備えて、組合員から「炭鉱労働者のうた」を募集し、三編の入選作が選ばれた。⁽⁸⁹⁾ このうち、炭労の委嘱により三井田川の中畑梅次が作詞した「炭鉱労働者のうた」と三菱上山田の大江将精が作詞した「燃えるポタ山」に、中央合唱団の岡田和夫といづみたくがそれぞれ曲をつけたが、結局「日本のうたごえ」では「燃えるポタ山」が歌われることになった。⁽⁹⁰⁾

「燃えるポタ山」の作詞者の大江将精は三菱上山田炭鉱で発行されていた文学サークル誌『山田文学』の中心的なメンバーであったが、文学サークル運動家が創作曲の作詞を行うことは珍しくなかった。たとえば、第三章でも触れた「炭鉱の娘」と「炭鉱の子」の作詞を行ったのは、宇部興産東見初炭鉱の文学サークル誌『まきやぐら』の中心的な書

き手であった花田克己であった。なお、「炭鉱の娘」と「炭鉱の子」の作曲者は、日鉄二瀬のうたごえ運動家玉置俊夫であるが、筆者の聞き取りによれば、作曲者として玉置を推薦したのは、うたごえ運動を通じて玉置と面識のあった大正の小日向哲也であった。⁹² 他方で、三菱上山田炭鉱の文学サークル『山田文学』の中心的な運動家であった森田ヤエ子は、三池闘争の過程で、「みんなでみんなで敵をうて」、「がんばろう」、「団結おどり」などの詞を書き、これらの詞に荒木栄が曲をつけた。⁹³ いずれの例についても、企業の粋やジャンルの違いを越えるサークル運動家の協力関係により、労働歌の創作が行われたことがうかがえる。

この時代に、炭鉱や炭鉱労働者をテーマとした歌が多数創作された背景としては、三池闘争を始めとする炭鉱労働者の闘いが、炭鉱労働者としての階級意識と連帯意識を力強く歌いあげる労働歌を要請したことが挙げられるだろう。他方で、産業別のうたごえ発表を軸とするうたごえ祭典のプログラムも、労働組合やサークル運動家に炭鉱や炭鉱労働者をテーマとする曲を創作するモチベーションを与えた。⁹⁴ 他方で、炭鉱や炭鉱労働者をテーマとした曲は、歌い手である炭鉱労働者に感情移入を促し、炭鉱労働者としてのアイデンティティを確認する効果をもたらしたことが推測される。

炭鉱や炭鉱労働者をテーマとした曲には、炭鉱における労働や生活のディテールがふんだんに盛り込まれた。たとえば、三池の組合歌「炭掘る仲間」の一番には採炭現場の光景が描かれている。以下に歌詞を掲げる。

みんな仲間だ 炭ほる仲間

ロープのびきる 真卸切羽

一九五〇年代における炭鉱労働者のうたごえ運動

未来の壁に たくましく

このつるはしを 打ち込もう⁽⁹⁵⁾

各地の炭鉱労働者は、四番の末尾の「三池炭鉱労働者」を各々の炭鉱の名称に入れ替えて「炭掘る仲間」を愛唱したらしいが、それが可能になったのは、この歌の中に描かれる光景があらゆる炭鉱労働者にとって身近なものであったからだろう。北炭夕張の森谷猛は、この曲を「自分たちの生活の歌」という意識で歌っていたと回想する⁽⁹⁶⁾。

炭鉱の風景を描いた作品もある。中でもボタ山（北海道ではズリ山）は、多用されたモチーフの一つであった。たとえば、炭労が行ったコンクール「炭鉱労働者のうた」の入選作「燃えよボタ山」の一番の歌詞を見てみたい。

高い山から見下ろせば

ハモニカ長屋 黒い屋根

点々繁る 夏草に

どっかと腰をおろしている

あれは硬山 いきている⁽⁹⁷⁾

三池闘争時の久保清の刺殺事件をめぐるって、森田ヤエ子が作詞をし荒木栄が作曲した「俺たちの胸の火は」の一番にもボタ山が登場する。

俺たちの ぼた山は

有明の 海ふかく

ふかくつきささり

あつい海鳴りが かえつてくる⁽⁹⁸⁾

もつとも、三池炭鉱の石炭は純度が高く三池にはボタ山が存在しなかったため、うたごえ運動家の間でこの歌詞をめぐって議論が起きたという⁽⁹⁹⁾。

花田克己の作詞した「炭鉱の子」と「炭鉱の娘」のように、炭鉱労働者の親子関係に焦点を合わせた作品もある。その背景として、炭鉱労働者の間では子が親の職業を継ぐケースが多く、しばしば炭鉱労働者としての階級意識が家族を通じて再生産されていたことが指摘できる。「炭鉱の子」の二番と三番を見よう。

ぢぢいは切羽に生命を埋めた

お父^とうは牢屋でたたかっている

お前は元気でお母^かあの腹を

蹴^やりけり育て 炭^ま鉱のあとつき

お父うもチビでお母もチビだ

一九五〇年代における炭鉱労働者のうたごえ運動

生れるお前もチビでもよいが

石炭にまみれりやこの炭鉱一の

やまの男の生命を継げよ⁽¹⁰⁾

ちなみに、花田自身の父親も炭鉱労働者で、この歌詞にあるように戦後直後に事故で命を落とした。「炭鉱の子」は、多くの炭鉱労働者のバックグラウンドを構成する世代間の連続性を次世代へ思いを託す形で詩情豊かに表現しており、炭鉱労働者の共感をさそったものと推測できる。

労働者間の仲間意識も主要なテーマの一つであった。たとえば、「みんな仲間だ 炭掘る仲間」のフレーズが繰り返される三池労組の組合歌「炭掘る仲間」は、炭鉱労働者の仲間意識をモチーフとした代表的な歌であろう。なお、「炭掘る仲間」の二番の歌詞に「たたかい進めた 俺たちの 闇をつらぬく うたごえが おい聞えるぞ 地底から」とある通り、この歌では、労働における仲間意識と闘いにおける仲間意識とが重ね合わされている。

炭鉱において、坑内労働はチームワークが重視される共同作業であり、また事故の危険性が高かったことから、共に働く労働者は運命協同体のメンバーでもあった。こうした労働現場における炭鉱労働者の仲間意識は、闘いの局面では、職制や資本家に対決する連帯意識に連結された。このような観点から、荒木栄の「燃やせ闘魂」の歌詞を見てみたい。

一 もやせ もやせ 闘魂もやせ(くり返し)

俺たちや炭鉱の 闘う炭鉱の 鉱山の仲間（くり返し）
もやせ もやせ 闘魂もやせ

二 むすべ むすべ 心をむすべ（くり返し）
俺たちや炭鉱の 闘う炭鉱の 鉱山の仲間（くり返し）
むすべ むすべ 心をむすべ

三 進め 進め ひるまず進め（くり返し）
俺たちや炭鉱の 闘う炭鉱の 鉱山の仲間（くり返し）
進め 進め ひるまず進め^(四)

この歌が「むすべ」と命じている炭鉱労働者の「心」とは、労働現場における労働者同士の団結心であると同時に、資本家に闘いを挑む労働者同士の連帯意識でもあるだろう。同時に、この歌に歌われている「鉱山の仲間」が挑む「闘い」には、過酷で危険な坑内労働と、資本家に対する困難な闘争の二重の意味が重ね合わされている。なお、「燃やせ闘魂」の反復の多いシンプルな歌詞は、リズムカルで力強い曲調と相俟って、二重の意味を持つ仲間意識と闘いを表現する上で大きな効果を上げている。

ところで三池闘争を闘ったのは、「燃やせ闘魂」に歌われた「鉱山の仲間」ばかりではない。三池闘争は典型的な「家

一九五〇年代における炭鉱労働者のうたごえ運動

族ぐるみ闘争」であり、炭婦協に組織された主婦も三池炭鉱の労働組合員と並んで闘争の主要な担い手であった。荒木栄は、闘いに挑む主婦と対話し、主婦の言葉を生かしながら、名歌「三池の主婦の子守歌」を創作した。^(四)この曲では、三池闘争において女性の置かれたマージナルな位置を反映して、男女の性役割・家族意識が強調されているが、それゆえにこそ女性たちに感情移入をせまる力があつた。以下に歌詞を掲げる。

一 雨の降る夜はつらかるね

ホッパーにらんで夜明けまで

無口のあんたが火を囲む

ビニール小屋に届きたい

腹巻き 綿入れ 卯酒

二 小さなこぶしをふり上げて

「けいかんかえれ！」と叫んだ子

眼玉を生命を奪われた

たぎる仲間の憎しみを

この子に孫に つがせよう

三 燃える三池の火の柱

ひろがれ国のすみずみに

かあちゃんたちの正しさが

勝利の朝をよんでいる

眠れ坊やよ 安らかに^(四)

他方で、「三池の主婦の子守歌」には、ホッパー決戦において、ビニール小屋に連日泊まり込んだ組合員と組合員である夫を気遣う妻、会社の雇った暴力団に刺殺された久保清ら暴力団や警官に傷つけられた組合員など、闘いの現実がリアルに描き込まれた。このことこそが、この曲の歌い手に、闘いの困難さと資本および国家権力の暴力を鮮明に想起することを迫り、激しい闘争心を喚起することを可能にした。

おわりに

本稿では、一九五〇年代の炭鉱を中心とするうたごえ運動について検討してきた。以下では、冒頭で問題提起を行った二点に即して全体の要点をまとめると。

まず、うたごえ運動が活発化していったプロセスについて。炭鉱におけるうたごえ運動は一九五三年頃開始され、一九五五年にかけて飛躍的な発展を遂げた。これは、全国的なうたごえ運動の展開とほぼ歩調を合わせた動きであっ

た。各炭鉱に組織されたうたごえサークルは、全国あるいは各地のうたごえ祭典への参加を主要な契機としながら発展した。また、中央合唱団の地方公演や地域におけるうたごえサークルの活動が、うたごえサークルが組織される契機となった場合も少なくなかった。

一九五三年に始まる「日本のうたごえ」や、ほぼ同時期から各地で頻繁に開催されたうたごえ祭典は、近隣の地域や同一の産業部門に属するうたごえ運動家の結びつきを強化した。これらのうたごえ祭典では、通常、地域別・産業別のうたごえ発表を中心にプログラムが組まれた。それゆえ、うたごえ運動家たちは地域や産業部門を単位として合同合唱団を結成し、大会当日には各々の地域や産業部門の特色を反映した歌を歌った。また、うたごえ運動家たちは、うたごえ祭典と合わせて開催される懇談会・交流会や、宿泊先や往復の列車の中で、交流を深めた。

次に、労働運動とうたごえ運動の関わりについて。一九五〇年代において、労働組合は文化活動を、組合運動を活性化するための重要な手段とみなした。そのため、炭労はうたごえ祭典やうたごえ講習会を開催するなど、うたごえ運動を強力にバックアップした。

うたごえは様々な文化運動の中でも、とりわけ労働運動と関係の深い運動であった。たとえば、メーデーや組合関係の集会・大会では頻繁に労働歌が歌われ、うたごえサークルや青年部のメンバーが一般の組合員の歌唱指導にあたった。また、ストライキなどの闘いの局面では、うたごえは労働者の闘争心を鼓舞し、団結を強化する大きな力を発揮した。通常、ストライキの際には、うたごえサークルや青年部が中心になり、組合員や家族を歌によって激励したり、また歌唱指導を行ったりして歌を広めた。また、中央や他社・他山から派遣されたオルグがうたごえ運動に加わり、闘争をバックアップすることもあった。三池闘争では、三池に派遣されたオルグによって大規模なうたごえ行動隊が

組織され、定期的に統一行動が展開された。

一九五〇年代には炭鉱や炭鉱労働者をテーマとした歌が多数作られた。炭鉱労働者のアイデンティティを強調し、職制や経営者に対する闘争心を鼓舞するこうした曲は、炭鉱労働者の闘いを大いに力づけた。

*本稿を執筆する上で、多くの方に聞き取り調査にご協力いただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。また、村田久さん、浦田伊佐雄さん、青木隆夫さんにはインフォーマントの紹介や資料の提供などの面で、多大なご支援を賜りました。深くお礼申し上げます。

注

- (1) 炭鉱における主要な文化運動の一つであった文学サークルの運動については、拙稿「炭鉱におけるサークル運動の展開——文学サークルを中心に(前)」、『国語国文研究』第一三三号、二〇〇七年、三一—四二頁、拙稿「炭鉱におけるサークル運動の展開——文学サークルを中心に(後)」、『国語国文研究』第一三四号、二〇〇八年、四四—五四頁、拙稿「炭鉱労働者と文化——一九五〇年代における文学サークル運動を軸に(上)」、『層』vol.2、二〇〇八年、二二—二四八頁を参照。
- (2) 炭労教育宣伝部「われわれの教宣・文化活動はどのように行われているか——「教育宣伝活動調査表」から」上、『月刊炭労』第六七号、一九五五年十二月、六二—六八頁、同「われわれの教宣・文化活動はどのように行われているか——「教育宣伝活動調査表」から」下、『月刊炭労』第六九号、一九五六年二月、五八—六六頁。
- (3) 中央合唱団については、藤本洋「うたは闘いととも——うたごえの歩み」音楽センター、一九八〇年、奈良恒子「うたごえに生きて」東銀座出版社、二〇〇七年などを参照。
- (4) 藤本前掲「うたは闘いととも」に、四七—四八頁。
- (5) 神谷国善「労働者作曲家 荒木栄の歌と生涯」新日本出版社、一九八五年、三八—四〇頁。

一九五〇年代における炭鉱労働者のうたごえ運動

- (6) 「火山脈並びに雄別における文化活動の推移」『火山脈』第五〇号、一九六〇年一月、二四頁、三三頁。
- (7) 「座談会 やまのうたごえ運動——炭鉱のうたごえオルグに参加して」『月刊炭労』第八九号、一九五七年一〇・一一月、六三—六八頁。この時、炭労は、中央合唱団員を北海道、山口、九州の各地区に派遣した。
- (8) 藤本洋「炭鉱におけるうたごえ運動の問題点——うたごえ講習会の討論から」『月刊炭労』第一〇八号、一九五九年六月、八二—八八頁。
- (9) 本間務編集『炭鉱のうたごえ 語り部ビデオ 北海道 三菱美唄炭鉱労働者による文化活動の記録 第五編その一 うたは闘いと共に 一九五四（昭和二九）年度、二〇〇一年（中西茂氏所蔵）。記録には開催月は示されていないが、写真に写っている人々の服装と曜日から判断して、一月八日（月）から一四（日）までと推測できる。なお、講師陣の顔ぶれは不明である。
- (10) 前掲奈良『うたごえに生きて』、八一頁。
- (11) 前掲藤本『うたは闘いととも』、六〇頁。
- (12) 以下は、横山照雄「中鶴『青空コーラス』生い立ちの記」『月刊炭労』第六四号、一九五五年九月、二四—二七頁による。
- (13) 「青年運動と文化運動の展望」『文芸誌 たかまつ』第一一号、一九五八年三月、四—一〇頁。
- (14) 同右、三二頁。
- (15) 同右、五頁。
- (16) 前掲神谷「労働者作曲家 荒木栄の歌と生涯」、三六—三八頁。
- (17) 神谷国善「第一回九州のうたごえ、九州青年合唱団誕生のころ」記念誌編纂呼びかけ人会議編『九州・福岡のうたごえの半世紀 記念誌』、二〇〇六年、三一—三二頁。
- (18) 「福岡県のうたごえ年表」、同右、八二頁。
- (19) 北村政祐「人生の転機となった一九五三年の荒木栄の歩み」『荒木栄研究』第二号、一九八六年、一一—一七頁など。
- (20) 森田ヤエ子『この勝利ひびけとどろけ——荒木栄の生涯』大月書店、一九八三年、七三頁。
- (21) 前掲神谷「労働者作曲家 荒木栄の歌と生涯」、三八—四〇頁。
- (22) 前掲森田『この勝利ひびけとどろけ』、八〇頁。歴木は宮浦坑に勤務する労働者の居住区の一つである。

- (23) 本間務編集『炭鉱のうたごえ』語り部ビデオ 第一〇編その二 働く者の文化を！ 一九六〇（昭和三五）年度、二〇〇三年（中西茂氏所蔵）。
- (24) 日炭高松青年婦人会議合唱対策部長山本英明が、昭和二十四年十一月一日付けで合唱サークル会員に宛てた「ごあんない」（九州大学記録資料館所蔵）による。
- (25) 入江氏、柳原氏への聞き取りによる（二〇〇八年一月二八日）。
- (26) 早野暉雄氏への聞き取りによる（二〇〇八年八月三日）。なお、大庭は音楽学校の出身であったようだ。宮本忠人『地底からの雄叫び 炭鉱労働運動戦後史——日炭高松闘争の経験から』光陽出版社、二〇〇〇年、三〇頁。
- (27) 以上、小日向哲也氏への聞き取りによる（二〇〇八年一月二七日）。
- (28) 『ボタ山のあるぼくの町 山口勲写真集』海鳥社、二〇〇六年、九六—九七頁。
- (29) 森谷氏への聞き取りによる（二〇〇八年一月一三日）。
- (30) 一九五五年に開催された「炭鉱のうたごえ」における約一五〇名の炭鉱のうたごえ運動家による討論をふまえた文章。『月刊炭労』第六七号、一九五五年一月、二四—二九頁。
- (31) 前掲横山「中鶴、青空コーラス、生い立ちの記」、広川精一「みんなに親しまれる合唱団になりたい」『月刊炭労』第七六号、一九五六年九月二四—二五頁など。
- (32) 前掲藤本『うたは闘いととも』、四九頁。
- (33) 同右、五六頁、『うたごえ新聞』第一号、一九五五年四月七日。
- (34) 「日本のうたごえ年表」『知性』一九五六年増刊号「日本のうたごえ」、五四—五五頁。
- (35) 「うたごえよ世界にひびけ」『炭労新聞』第二六二号、一九五五年二月一日。なお、一九五五年の「日本のうたごえ」への炭労からの参加は一四五名である。
- (36) 表1参照。表1には開催時期と会場が特定できた祭典についてのみ記載した。実際には、さらに多くのうたごえ祭典が開催されていたものと推測される。なお、表の作成にあたっては、前掲『九州・福岡のうたごえの半世紀 記念誌』、『炭労新聞』、『うたごえ新聞』、『闘いのあけくれ 組織統合五周年を迎えて』（赤平炭鉱労働組合、一九五八年）、小日向哲也「うたごえは平和の力——第三回

一九五〇年代における炭鉱労働者のうたごえ運動

筑豊のうたごえ報告』『裸像』第二〇号、一九五四年五月、二〇―二三頁などを参照した。

(37) 安部幸雄「日本のうたごえに参加して」『まきやぐら』第二〇号、一九五六年三月、一六一―一七頁。

(38) 前掲藤本『うたは闘いとともに』、七八頁。

(39) 「うたごえよ世界にひびけ」『炭労新聞』第二六二号、一九五五年一月一日。

(40) 「炭鉱労働者のうた（歌詞）入選作きまる」『炭労新聞』第二五七号、一九五五年一月一日。「炭鉱労働者のうた」作曲もできあがる。『炭労新聞』第二六〇号、一九五五年一月一日。当初のタイトルは、「燃えよポタ山」であった。

(41) 「うたごえよ世界にひびけ」『炭労新聞』第二六二号、一九五五年一月一日。

(42) 「なりやまぬ満場の拍手」『炭労新聞』第二五六号、一九五五年一月一日。

(43) 同右。

(44) 「速報 九州のうたごえ準備進む」（九州大学記録資料館所蔵）。

(45) 前掲「なりやまぬ満場の拍手」『炭労新聞』第二五六号、一九五五年一月一日。

(46) たとえば、全九州合唱団会議事務局が一九五四年一月五日付けで発行した「日本のうたごえ」参加のためのニュースとご案内（九州大学記録資料館所蔵）は、「日本のうたごえ」に向けた準備のために全九州合唱団会議の召集を呼びかけている。

(47) 五〇―五三頁。

(48) 後述するように、日鋼室蘭の労働者が北海道の炭鉱労働者の支援を受けて合理化反対闘争を闘ったことが、両者の連帯意識の背景にあった。

(49) 前掲石川・秋田「ルポルタージュ 北海道炭鉱のうたごえ」、五三頁。

(50) 入江氏への聞き取りによる（二〇〇八年一月二八日）。

(51) 森谷氏への聞き取りによる（二〇〇八年一月一三日）。

(52) 「うたいつがれて四十年 メーデー歌の移り変り」『みいけ』第六一九号、一九六〇年四月一七日。

(53) 「意気天を衝く二六回メーデー」『炭労新聞』第二四一頁。

(54) 原氏への聞き取りによる（二〇〇八年一月二六日）。

- (55) 『火山脈』第三号、一九五五年七月、一一一—一七頁。
- (56) 岩井氏への聞き取りによる(二〇〇八年三月一日)。
- (57) 前掲本間『炭鉱のうたごえ』語り部ビデオ 北海道 三菱美唄炭鉱労働者による文化活動の記録 第五編—うたは闘いと共に—一九五四年度(昭和二十九年)。以下の記述も同ビデオによる。
- (58) 『月刊炭労』第一〇七号、一九五七年五月、一一一—一二三頁。
- (59) 以下は、『闘いのあけくれ 組織統合五周年を迎えて』赤平炭鉱労働組合、一九五八年、一三二—一三七頁、『闘いのあけくれ(第二輯) 赤平炭鉱労働組合、一九六三年、七頁を参照。
- (60) 笠嶋一『炭労闘争の体験をそのまま—日鋼室蘭闘争の思い出』『炭労 激闘あの日あの時』日本炭鉱労働組合、一九九二年、一七二頁。
- (61) 『王子争議 オルグ日記』『月刊炭労』一〇七号、一九五九年五月、一三八頁。
- (62) 『敵よりも一日ながく—統一と団結の九十六日』杵島炭鉱労働組合、一九五八年、七七頁。
- (63) 同右、九八頁、一八一頁、二七二頁。
- (64) 花田克己『うたは闘いとともに(1)』前掲『炭労 激闘あの日あの時』、二七二頁。
- (65) 『総評うたごえオルグ 座談会』『炭労新聞』第四五七号、一九五九年一月四日。
- (66) 木下氏の文書での報告による(二〇〇八年九月二四日受領)。
- (67) 曾村氏への聞き取りによる(二〇〇七年一月一七日)。
- (68) 村上氏への聞き取りによる(二〇〇八年一月二六日)。
- (69) 前掲神谷『労働者作曲家 荒木栄の歌と生涯』第四章第一節、「団結は労働者のいのち 各地で三池応援活動起る」『うたごえ新聞』第九九号、一九六〇年四月一日。
- (70) 前掲藤本『うたは闘いとともに』、一一〇頁。
- (71) 『闘いをはげますうたごえ行動隊』『うたごえ新聞』第一〇〇号、一九六〇年四月一日、前掲神谷『労働者作曲家 荒木栄の歌と生涯』、一一〇頁。

一九五〇年代における炭鉱労働者のうたごえ運動

- (72) 前掲神谷「労働者作曲家 荒木栄の歌と生涯」、一二三頁。
- (73) 「青空保育園とうたごえ行動隊」『炭労新聞』、第五〇八・五〇九号、一九六〇年七月二〇日。
- (74) 「西日本のうたごえ開く」『炭労新聞』第五一四号、一九六〇年八月一七日。
- (75) 神谷国善「三池の炎を全国に うたごえ行動隊の記録」『うたごえ新聞』第一一七号、一九六〇年一〇月一五日。
- (76) 「西日本のうたごえ開く」『炭労新聞』第五一四号、一九六〇年八月一七日。前掲森田「この勝利ひびけとどろけ」、一八八—一八九頁。
- (77) 柳原氏への聞き取りによる（二〇〇八年一月二八日）。
- (78) 入江氏への聞き取りによる（二〇〇八年一月二八日）。
- (79) このほか、ロシア民謡も愛唱された。筆者の聞き取りでは、多くのインフォーマントが最も好きな曲として「ともしび」を挙げた。
- (80) 「民独」誕生の背景については、川上充『品川の記録 戦前・戦中・戦後——語り継ぐもの』（本の泉社、二〇〇八年、一五九—一六八頁）などを参照。
- (81) 前掲北村「人生の転機となった一九五三年の荒木栄の歩み」、一一二頁。
- (82) 『上野英信集1 話の坑口』径書房、一九八五年、九—二三頁。
- (83) 一九五五年六月、六六頁。『月刊炭労』第五八号（一九五四年二月）にも楽譜が掲載されている（三七頁）。
- (84) 前掲藤本『うたは闘いとともに』、六三頁。
- (85) 「うたごえは平和の力 二万五千人の大合唱」『炭労新聞』第二三六号、一九五四年二月一日。なお、「一九五三年日本のうたごえ」では「常磐炭鉱節」も歌われた。
- (86) 『月刊炭労』、第六八号、一九五六年一月、六一—七二頁。
- (87) 森谷氏への聞き取りによる（二〇〇八年一月一三日）。
- (88) 小日向氏への聞き取りによる（二〇〇八年一月二七日）。
- (89) 「炭鉱労働者のうた（歌詞）入選作きまる」『炭労新聞』第二五七号、一〇月一日。
- (90) 「炭鉱労働者のうた」作曲もできあがる。『炭労新聞』第二六〇号、一九五五年二月一日。当初のタイトルは「燃えよボタ山」

であった。

- (91) 「うたごえよ世界にひびけ」『炭労新聞』第二六二号、一九五五年一月一日。
- (92) 小日向氏への聞き取りによる(二〇〇八年一月二七日)。なお、花田と玉置の間に直接のやりとりはなかったようである。前掲花田「うたは闘いととも(1)」。
- (93) 作詞の経緯については、前掲森田『この勝利ひびけとろろけ』第七章を参照。
- (94) 「日本のうたごえ」における「産業別のうたごえ」において、炭鉱の合同合唱団は、一九五五年度に「燃えろポタ山」と「おぼろ月夜」を、「うたごえよ世界にひびけ」『炭労新聞』第二六二号、一九五五年一月一日)、一九五六年度に「燃えろポタ山」と「炭鉱ばやし」を(『日本のうたごえ』開く)、『炭労新聞』第三〇五号、一九五六年二月七日)、一九五七年度に「炭鉱の娘」、「鉱山は生きてゐる」、「同志よ固く結べ」を(「出演曲目などきまる」)、『炭労新聞』第三五七号、一九五七年一月二二日)、発表した。
- (95) 三池炭鉱労働組合編『みいけ二〇年』労働旬報社、一九六七年の扉より。
- (96) 森谷氏への聞き取りによる(二〇〇八年一月一三日)。
- (97) 「炭鉱労働者のうた(歌詞) 入選作きまる」『炭労新聞』第二五七号、一〇月一日。
- (98) 前掲森田『この勝利ひびけとどろけ』、一七七頁。
- (99) 村上昭一氏への聞き取りによる(二〇〇八年一月二六日)。
- (100) 『まきやぐら』第三三三号、一九五九年七月、一九頁。
- (101) 花田克巳氏への聞き取りによる(二〇〇六年九月二九日)。
- (102) 音楽センター『荒木栄作品集』『不知火』解説書『音楽センター』、一九七二年、二〇頁。
- (103) 神谷『労働者作曲家 荒木栄の歌と生涯』、一一一―一二三頁。
- (104) 前掲『荒木栄作品集』『不知火』解説書、二六頁。